

誰が音楽を殺すのか？

なかなか凄いタイトルですね。「ファンタスティックな新世代オーディオ・フォーマット戦争」にしようか迷ったのですが、それはさておき本誌には珍しくスポーツ新聞の見出しみたいですが、ちょっと周りを見渡しながらかえてみましょう。表題は、カルチャー・マガジン『コンポジット』22号(2001年6月10日発売)の特集のタイトルです。僕も毎号読んでいる人気雑誌のひとつですが、見たことない方はこの号を是非一読されることをお奨めします。さわりだけ引用紹介します:

「ここ半世紀にわたり、音楽はユース・カルチャーを先導してきた。しかし今、音楽はエッジを失い、人畜無害なものに成り下がったのではないか？ 新しいものがもう生まれえないのか？ 音楽は時代を牽引するカルチャーたりえないのか？ だとしたら、音楽を殺しているのは誰なのか？ ミュージック・シーンをめぐる、この哲学的問題に迫る」

さらに各コーナーでは、「坂本龍一：音楽の進化は止まったのか？」、「カルチャーをめぐる新教養主義を批判する」、「ロック・ジャーナリズムの終焉は、ポップの終焉を意味するのか？」、「ダメなCDが次から次にリリースされるのはなぜか？」、「決して自分の金でCDなんか買わないディレクターの話、他。その中で「音楽キーマン30人緊急アンケート」の回答(匿名でぐちをこぼすのではなく、皆さん実名でばんばん語っているのが笑えます)を拝見しているうち、これは是非本誌の読者にも読んでいただき、音楽はまだまだ死んではいないよ、ということ世の中に正確にデモンストレー

ションしていかなければいけないと強く思いました。魅力的なソフトとそれを的確に再現できるハードとノウハウがなくしては伝わりません。僕の連載のテーマとするところは第1回に述べましたが、技術情報よりも、「音」を創り出す現場に携わる方に「既存の概念にとらわれない自由な発想」の僕なりの例を提示していくことにあります。

最近の音楽はつまらない、音楽が殺されている、と思ったことはありますか？

『コンポジット』誌が表題の特集をすることについてを問題視する意見も多かったわけですが、挑発的な設問に対する僕の回答として、つまらなくなった原因を分析してみました。

(1) バイヤー(レコード店の仕入れ担当者)の尊厳をなくしてしまった大型レコード店の経営。少なくとも5年前まではバイヤーが売り場のカラーや音楽の流行までを創っていた。それにバイヤーを中心にした情報交換の場でもあったし、インディーズでも気に入れば応援してくれた。今後はそんな甘いことは言っていられなくなる。(2)の方程式に合致しない音楽は、店舗では商品とみなされない。この先2年でディストリビューターと小売店の関係はさらに急激に変化する。

(2) (1)の原因とも言える、レコード会社の体制。音楽自体や音楽環境を育てることよりも「短期間により多く流れる商品=優れた音楽」という方程式を貫いてきたこと。少子化で社会に占める割合は子供より大人が多くなるのは確実

であるのに、いまだに子供向けのマーケティングを続けている。CD売り上げは年13%ダウン。今や小遣いを貯めてアルバムを買うなどというティーン・エイジャーはいない。高校生は携帯電話に毎月1万円使っても、CDには500円しか使わない。そしてメジャー・レコード会社では、音楽が好きな人ほど働き場所がなくなるという現象が起きた。

(3) 日本人の弱点として、簡単に情報操作されてしまう。レコード店の店長、自称評論家、自称エンジニアの中に音楽体験や知識が著しく乏しい人間が増えた。広告やインターネットなどにより、正しいかどうか判らない情報を信じ、MP3のようなデジタル・コンテンツを音楽だと思っている人たちが現れた。自分の体験を通して、好きなものすら、あるいは正しい情報を選択できない人が増えた。「自分の責任で確信する情報」にしか「情報の価値」はない。暇があったらライブも聴きにいき、本物の音を聞け。



『コンポジット』22号(報雅堂刊)

(4) もうひとつの日本人の弱点、見えないものには金を払いたくないという事実。友人のCDをコピーしよう! などというのは、ハード・メーカー業界からしてソフトに関する認識がまるででない。著作権使用料なんかなるべく払いたくない、という考え方が存在している。僕はJASRACの準会員だが、放送のBGMで自分の楽曲をいろいろ使ってもらっても使用料はほとんど入ってこない。分配方法が問題なのか? JASRACの理事には民放系音楽出版社が入っているからか? Jポップやカラオケだけが音楽文化ではない。

(5) (1)(2)を不況や社会のせいにしてはいけない。エンターテインメントの中でも「本物の音楽」はこういう時代にこそ必要なものだ。クラシック、ジャズ、ワールド・ミュージックは常に原点として大切にしなければならぬ。エンジニアはデータ圧縮技術と並行してハイエンド・オーディオも続けていかないと技術の進歩は止まってしまう。

(6) 個々が認識しないと変わらないであろうが、音楽家側の危機感の欠如も原因と言える。自分の楽器や音楽以外のことに対して不勉強になりがちである。周りに対する甘え。音楽家として続けていきたければ知っておかなければいけない事は多い。最低限、契約書や著作権。いかなるケースもお金の話は事前にクリアしておくべきである。音楽のジャンルに好き嫌いがあるのは仕方がないし、お金の結びつきやすい音楽とそうでない音楽があるのも仕方がないが、本来、作り手側は(1)(2)に限らず、徹底してポジティブな気分でないといけない。他人になんと言われようと、自分の置かれている状況に文句を言うだけでは夢は幻でしかない。お前、こんなに偉そうなこと並べて「サイデラ・レコード」についてそんなに自信あるのか? と言いたい人もいるのである

う。聞き手が音楽のジャンルの好き嫌いはあるとして、もちろん自信はある。自信ない作品なんて買ってくれるお客様に対して失礼ではないですか。

(7) (2)について徹底した戦略をとれば、「エイベックス」や「吉本興業」のようにターゲットを日本からアジア全体にシフトして成功する例だって増えている。日本だけとか、自分の周りだけというのではもう駄目であろう。

では、音楽より面白いと思うことは?

我々(どの世代の誰のことやら?)が歳とってから若者の音楽は理解できないのでしょうか? 若い世代を中心にCD買うより携帯電話やゲーム、だからレコード会社は音楽だけに特化することはやめた? ラジカセと配信でいいか。彼らは新世代オーディオやサラウンドには興味ないんじゃないか? いいえ、彼らはそういうの見たことも食べたこともないだけです。

しいて、音楽より面白いことを挙げるとすれば、おいしいものを食べること。「音楽は趣向品だからなくても生きていける、でも食べ物はないと死んでしまう」という意味ではない。(2)でいう音楽とはコンビニのおにぎりだとすると、僕がいう(好きな)音楽は、世界で一番おいしいネグトロと20年通い続けているあるチャイニーズ・レストランの食事だ。別に特別なものではない。これが僕の好きなもののスタンダードだ。売れている音楽のすべてがコンビニのおにぎりというわけではないですよ。都会の騒音の中でCDやラジカセ、大音量のライブでしか音聞いてない人、CDも買わずに(買っても聴かずか)インターネットで時間をつぶしているような人に向かって、耳を澄まして心で聴くとか、気配を察知する、なんて言ってもなかなか理解してもらえないでしょ。第六感どころ

か聴覚が退化していることに気がついていないグループの人がいる。本物を体験していればMP3だって情報としては楽しめますよ。

5年半前に「サイデラ・レコード」の売り上げから自分でプロデュースする作品のクオリティー・コントロールのために必要な道具として「サイデラマスタリング」を作った。その作品の音を聞いて、作曲や制作の依頼がくる。スタジオや録音エンジニアというのは、便利屋と職人の両方の資質が必要なサービス業である。技術をサービスとして開放する。レストランとシェフの関係、ある意味では医者にも似ている。初めてCDを作る人には何でも教え、ベテランには録音の不安などない自然体を導き出す。現在、「サイデラマスタリング」は最高にいい環境ができて、さらに進化している。まことに残念なのは、プライオリティーをたてて無駄な時間は極力減らしているにもかかわらず、この環境で聴きたいCDがたまっていく一方なのだ。食道楽に走っているわけではない。「SACDマルチチャンネル・フォーマット」の製作にかなりの時間がかかっているのだ。

「音楽業界」なるものがあるとすると、これからはっきりしていることは、「メジャーでしか実現できない企画」と「インディーズであるから続けていける音楽」の二つに分かれる。(2)の方程式に合致しない音楽はインディーズでないビジネスにはならない。

もっと徹底してこだわりを楽しみましょう

雑誌編集者やカメラマンには、音楽業界(この場合、商業音楽)以上に音楽を愛する人が多く、職業からBGMを楽しむことも可能なのです。売れる売れないに関係なく音楽に敏感な、音楽の消費者の一部であり、仮に音楽業界と括られる社会があるとすると、そのぎり

ぎり外側であり、かなり自由です。これは、ややも悲観的な見方をすれば、そのぎりぎり内側に属するグループは、それを仕事とするがために「自分の好きな音楽」はさておき、自分の趣味趣向とは全く異なるものを扱っていたりすることがあります。ただ最近少しだけ違うかなと思うのは、仕事だから、という理由で(内側なのに)「こだわり度」が低いグループが確実に存在していることです。

例えば、経験が浅いエンジニアでもしっかりと自分のこだわりを持っていることはとても大切なことです。「プロツールズ」でもチューブ・マイクでも、ジャズやクラシックの録音からみればむしろちゃんとしたセッティングがポップスではおもしろいこともあるのです。僕なんか最近SACDマルチばかりやっていますから、さぞかし位相だ定位にうるさいんだろうと思われていますが、昔はマイクの指向性をわざと逆にして使用したり、EQ

Masashi Nagao & *The Orpheans*



Kiss Me Again

Masashi Nagano & The Orpheans
[Kiss Me Again] (Techno-Venture M.N.O.55)

をシリーズに2段通して+30dBのピーク作ったり、でもそういう経験や実験が今にしてみればノーEQでどんな音でも録音できる基礎となっています。たとえ先輩方に使用方法が理解されなくとも、音を生かすために確信するこだわりがあるなら全く気にしなくていいのです。どうどうと続けていけばいいのですが、最近は一見便利になったDAWのせい



Yae.new Aeron
(ボニー・キャニオンPCCA-01538)

で可能性ばかりが残せ過ぎるがために、時間はかかるは皆からあだこうだ言われてストレスはたまる、おまけに友達もいない、という話を耳にすると、これも表題の原因なのでは、と考えてしまいました。もっと徹底してこだわりを楽しみましょう。

Masashi Nagano & The Orpheans
[Kiss Me Again]より



最近こんなすごい音楽に出会った

もし表題の最初の設問にNOと答えると「では、最近の音楽で面白くものはありませんか?」になるわけですが、僕も他の回答者と同じく、自分が係わっている音楽には面白くないとは思っていないのはあたり前です。これだけでは全く不十分で、ここに紹介する3つの作品は、今すぐレコード屋に走れ! というほど推薦できるものです。(1)と(2)は読者の方から抽選でそれぞれ1名ずつプレゼントいたします。Email: xxx@saidera.co.jp または FAX (03) 5410-8385 へ住所、氏名、年齢、職業をお書きの上お申し込みください。

(1) 長尾正士とオルフェアンズ/

キス・ミー・アゲイン

僕は、ジャズが大好きです。自分の感

性は今までの仕事の中から仕込まれたとも思えます。ジャズに関わってよかった! 歴史的名盤、重要盤に偶然に仕事が続いてくるのは運命です。このアルバムのマスタリングが来た時には本当にジャズを続けてきてよかった、と思いました。とにかく聴いていただくのが一番で、作品の意味を僕から説明するのは、難しいものですが、長尾さんは現在92歳、マスターはライブ会場でのカセットテープです。

「兼ねてから最も敬愛するジャズ界のバイオニア・ジェントルマン、長尾正士さんのオーケストラ、オルフェアンズのCDアルバムが発売されることとなりました。一人でも多くの方に、長尾さんとメンバー全員の素晴らしい演奏をきいていただきたい、と心から願って～略～。瀬川昌久(ライナーより)」

ジャンルは変わりますが最近やった中

で、86年当時20歳だった「ドント」の作品もマスターがカセットテープでした。マスターがカセットで録音する場合、僕のセッティングはまるでレコーディング時の音決めのようになります。ケーブルからアナログEQも2段、さらに「TCエレクトロニックM5000」、「ソニーDRE-S777」サンプリング・リヴァーブ、これらの組み合わせで遠慮なくEQしていきます。

(2) Yae:new Aeron

「大地を渡る風の匂いを感じた時に、あるいは満点の星を見上げた時に、思わず口をついて出てきたような歌である。空に向けてまっすぐに差し出された両手や自然に頬を伝う涙と同じ、動物的本能や感覚に直結した声。ずっとずっと昔、この世界に音楽が、歌が自然に生まれ出した瞬間に立ち会ってしまったかのようななんとも言えない驚きと清々しさがここにはある。～中略～志

スーパー歌舞伎「新・三国志II 孔明篇」より(写真提供:松竹) これから大阪松竹座(9月5日～10月26日)にてご覧になれます



の高い音楽だと思う。巷の流行とはまったく関係ない。この人は、売れる売れないに関わらず、新しい時代とそこに生きる自分の姿を夢想しながら、一生歌い続けていくはずだ。僕もそういうスタンスで彼女の歌を聞き続けていきたい。松山晋也(資料より)

鎌田岳彦くん(エンジニア)による「プロトools」による録音。2000年8月号でも紹介しましたが、「サイデラ」では「プロトools」のマスターとしてハードディスクの持ち込みを推奨しています。「dB 4496」システムと「GML 9100」ミキ

サーに「チューブテックMEC1A」より、もっともハイ・レゾリューションの再生が生きます。シンプルにノーEQ、もちろん必要な場合EQもできます。

(3) スーパー歌舞伎

「新・三国志II 孔明篇」

市川猿之助さん総指揮のスーパー歌舞伎、実は僕は初めて新橋でゲネプロを拝見させていただいた時には、本当に驚きました。衣装、セット、動き、台詞、音、すべて。イタリアやロシアのオペラも凄いです、日本のスペクタクル総合芸術。ここまでくるとこだわりは半

端ではありません。内容はこのスペースでは書けませんから、そのこだわりを学ぶだけでも十分ここに紹介する価値があることをお伝えします。

音楽録音はロシアですよ。モスクワ交響楽団とボリショイ歌劇団の厳選メンバーによる80人のオーケストラ発録音(あと半分は対照的にシンセなので)。僕はそのロシア録音の部分にだけ参加したのですが、旅なれているとはいえ大変なものでした。つまり楽しくきつい仕事であったということです。加藤和彦さんから例によって突然声を



「新・三国志II 孔明篇」のロシアでの音楽録音



「新・三国志II 孔明篇」の音楽を担当した加藤和彦さん



マイキング

かけられた時、「セイゲン、モスクワにキャビア食いに行かない? マスタリングそこで頼むよ。録音もやってもらおうか」機材の選択、CD化のスケジュール、すべての段取りを2~3日で済ませました。しかも録音からわずか2週間後には、新橋演舞場にてサウンドトラックCDが並んでいるというスケジュールです。スタジオですべての機材をセットして無事に動作することを確認した後、即パッキングです。

こういう時に「スチューダーD19」と「タスカムDA-78HR」の組み合わせは本当に素晴らし



上からバックアップの「ソニーTCD-D6」、「スチューダーD19リモート」、「タスカムDA-78HR」、「D19 MicAD STAGE」(8chヘッドアンプ&ADコンバーターTDIFインターフェース付き)

い機動力です。この組み合わせは自分の「Seigen Ono Ensemble at the Blue Note Tokyo」の時も、さらには「ソニーPCM-800」(DA-88のソニーUSA向けOEM)で数多くのセッションで使用している得意のセッティングです。しかも今回は「DA-78HR」で24ビット8トラックですが、あとでミックスダウンするための8トラックではなく、メイン1ポイントのほかに、バックアップの位置を2箇所、念のためスポット・マイクも押さえておくことが目的です。8チャンネルの

マルチから後日ミックスしよう、と考えがちですが、その場で決めてしまうダイレクト録音は、音が良い上にミックスダウンのスケジュールも要らないのです。もっとも今回の場合はとても日程を増やすことは言えません。メイン・ステレオ・マイクは、指揮者頭上、約3m幅にセットした「ノイマンTLM50」です。バックアップには「ゼンハイザーMKH40」と「MKH20」が収録されています。

サントラCDに良いバランスが、オーケストラ向きではない新橋演舞場でサ

ントラに使用しやすいかという、台詞や他の音との関係でそうでもないことがあります。そのためにバックアップのポジションのトラックは有効な方法でした。この段階では「タスカムDS-D98」は完成していなかったのですが、DSD録音にこだわっている僕としては1台で2ch DSDか24ビット8chかという選択がある場合はDSDを選ぶことになります。

ところ変われば社会の常識も変わるもので、あるグループに属する人たちの常識は、反対側のグループでは非常識な場合もあります。米露首脳会談などでテレビでも民主化されたロシアの様子が紹介されます。現地で聞いた話ですが、「市内電話」どころか「電気や水道料金」という概念が存在しないそうです。要するに課金するというシステムを構築して各家庭にメーターを取り付ける費用の方が高くなってしまふから、そのままタダの方が今はいいということ？ 日本ではゼネコンが立派なコンサート・ホールを建てても、音楽家や音響には予算がないという話をしたら、理解してもらえませんでした。

次号では 「SACDマルチチャンネル・ フォーマット」について

加藤さんと毎晩ウオッカを飲んでいるうちに、常識を捨てて自分流のこだわりを持つためのヒントを見つけました。前回紹介した「ザ・トニー・ベネット・ビル・エバンス・アルバム」がアメリカでハイ・エンドのバイブルと言われている「Stereophile(ステレオフィール)」という雑誌の7月号で「Record of the Month(レコード・オブ・ザ・マンズ)」を取りました。おめでとうございます！ 次号では、8アルバム仕上がっている「サイデラ・レコード」のSACDマルチチャンネル・フォーマット作品の快楽をお届けしましょう。